田中隆尚撰集

第十三巻

田中隆尚撰集　第十三巻

平成十八年十一月十五日印刷
平成十八年十一月二十五日發行

著　者　田中隆尚
發行者　唐澤明義

發行所　展望社
郵便番號一一二・〇〇〇二
東京都文京區小石川三・一・七
エコービル二〇二
電　話　〇三(三八一四)一九九七
FAX　〇三(三八一四)三〇六三
振替〇〇一八〇・三・三九六二四八

印刷・壯光舎印刷／組版・エムツークリエイト
ISBN4-88546-161-8

紀行五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

韓國風物誌……五
ろんどん好日……二五三
編集覺書……四八三

韓國風物誌

昭和五十二年三月十四日　月曜

午後五時すこしすぎに出帆した。港は戰前の關釜連絡船のでてゐたところで、いまから四十一年まへ中學の同級生はここから朝鮮滿洲の修學旅行に旅だつた。そのときわたしは父の禁止のためにゆけなかつたので、事情もすつかりかはつたいま、はじめてその後をおふことになる。けさはくもつてゐたが、いまは空ははれ、日が下關のかなたの空にまだたかい。巖流島のそばをとほり、はじめて巖流島をちかぢかとみた。巖流島は草がれた、ひらたい島であつた。船はやがて彦島のうらの水路にはいつた。家もなにもなく、自然のままの砂濱がわづかにみえるものの、土がところどころけづりとられて、きたない。本州の山々のあひだに火ノ山がみえた。一瞬なつかしさがわいたが、いまは歴史上の山といふより俗惡な觀光施設がめだち、旅人のこころをかなしませる。本州の西の側面があらはれ、ガスタンク、工場がならび、林立した煙突からしろい煙がたちのぼつてゐる。小學校のとき遠足で二里ばかりもあるいていつた綾羅木の濱をなつかしんだが、いづこともわからない。海綿のとれた、あのうつくしい濱もうめたてられてしまつたのだらうか。四十年以上もたつて、はじめて海の沖から瞥見しようとおもつたのに、それもはかないことであつた。しかし六連島がみえるあたりから本州の岸

も保存されてゐて、岩が海にそばだち、そのうへに松がはえてゐる。その六連島に家はみえないが、石油タンクがある。ちかくに小島がたくさんあり、それで六連島といふのであらう。六時をすぎたが、日はまだ海上にややたかく、しづむことなく靄のなかにかくれてしまつた。ひらたい島が沖にみえてきた。蓋井島であつた。

船旅を今度もたのしみにしてゐたが、この船は國際船なのに川崎日向間の船にもおよばず、むさくるしい。一等船室でさへ洋室は四人部屋、和室は二人部屋なので、和室にしたが、毛布に蚤でもゐさうでおちつかない。沖の島を八時二十分に、對馬を十時ごろとほるといつたが、それまでおきてゐる氣もしなくて、うすい敷布團をしき、毛布をかぶつてねた。いく時間かたつて、まどろみながらふと目をさますと、左がはにかなりながい距離にわたつて、點々と燈火がつらなつてゐる。十時まへで、まがひもなく對馬であつた。その燈火は航海用のためなのか、かなり大きな光で、ひとつひとつかなりはなれてゐて、おもひがけずながくつらなり、そのほかには街らしい燈火の密集はみえない。それがなにかものがなしい氣分をかもしだし、いまから七百三年もまへに元寇の役でこの孤島で戰死した對馬の守護代宗資國以下の將兵のことをおもひおこさせた。

三月十五日　火曜

船は零時五十分に釜山の港の沖について、停泊してゐる。夜があけるまで船室でねてゐなくてはならない。これはむだなことで、朝出帆するやうにすれば、このむだがはぶけるのにとおもつたが、乘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

船前と下船後に日本がはと韓國がはの國境の檢査があり、それに時間がかかるので、一日に一便とすれば、この時間が一番都合がいいといふことがわかつた。

六時におき、船のなかで朝食をとつた。客はほとんど韓國人だが、朝食は和食しかない。そのあと種痘證明の檢査があつた。七時半すぎて船は棧橋にむかつた。港にはたくさんの船が停泊し、陸には家々が櫛比してゐる。韓國人の老人と青年が荷物をもつてたつてゐるので、これを機會にふたりにはじめて朝鮮語で話しかけた。

「水原まで釜山から列車でどのくらゐ時間がかかりますか。」

するとふたりは、水原までは高速道路のはうがいいのではないか、いや高速道路は水原にはとまらない、やはり列車だ、四時間くらゐかなどとかたりあつた。わたしはそれをはたできいて、「わかりました。ありがたうございます」といふと、「そのくらゐおわかりになれば、たいしたものです。韓國語はどこでおならひになつたのですか」といつた。

「今度韓國にくるためにテイプで十ケ月ほど勉強しました。韓國には一ケ月滯在する豫定です。」

「なんのおしごとで。」

「お國の歴史と文化の研究のためです。」

「大學の先生でいらつしやるのでせう。道理でお上手のわけだ。このうへ一ケ月いらつしやれば、ずゐぶんお上手におなりでせう。」

これはさいさきよかつた。今度の勉強は一週に一度、わたしの授業に出席してゐる濟州島出身の女

子學生にみてもらつたので、完全に獨習といふわけにはゆかないが、そのあひだに中間型狹心症で入院して、病院でも一ケ月あまり毎日勉强するのをやすまなかつたので、いろいろとおもひだすことがおほい。それにハングルの文字を一見よみとることが困難で、それに一番苦勞した。

船からおりて、旅券や所持品の檢査をうけ、ウオンに換金(百圓およそ百五十ウオン)して、構外にでると、すぐタクシイ乘場がみつかつた。

「プウサンヨク。」

今度の旅行は昨秋の病以來はじめての旅なので、あまりむりして節約しないことにして、驛までは二キロそこそこらしいが、最初からタクシイにのることにしてゐたので、ためらひもなくさういつた。すると運轉手はききとれなかつたらしく一瞬顏をちかづけた。

「プーサンヨーク。」

まだわからぬ。これしきのことがどうしてわからないのかとおもつて、もう一度「プーサンヨーク」といつたが、やはりわからぬ。わたしはやむなく「停車場(チョンチャジャン)」といひなほさうとしたが、運轉手はそれをまたずに、そこいらに日本語のわかるものをさがしにいつた。これはわたしの意氣ごみをくじく行爲で、韓國上陸第一歩の印象をわるくした。わたしが「プーサンニヨク」とリエゾンしなかつたのがわるかつたのだらうか。それよりもわたしの發音自體がわるかつたにせよ、日本人の口から韓國語がでようとは夢にもおもはなかつたためではあるまいか。いづれにせよ、やむなくわたしは運轉手がつれてきたぢいさんに「ふざんえき」といひなほすと、それでことがすんで、車は數分で釜山驛につい

た。

案内所がみつからないので、切符賣場にいつて數人の列のうしろにつくと、時間がないのか、わたしをつきのけて、あひだにひとりわりこんだ。會話の本に驛で切符を買ふ場面がなかつたので、いやそれよりも案内所で水原ゆきの便利な列車についての知識をうるひまがなかつたので、さつそくどういふ表現をしたらいいか、おもひあぐんだ。

「水原までゆきたいんですが。」

驛員はまづさうわたしのいふのをきくよりさきに、わたしをみてたちあがり、奥にひつこんでいつた。そしてともなはれてきた驛員は日本語で「どちらまで」といつた。わたしは最初の驛員が特急か、急行か、一等か二等かといふのを期待してゐて、その返事によつて列車をきめようとおもつてゐたが、これで日本人から韓國語などきかうとは期待してゐないことがわかつた。「九時の急行がでます。いそいでのつてください」といつて、その驛員は切符をくれたので、改札口をはいつて列車にのつた。

列車はこんでゐたが、ふたりがけの席で、さいはひ左の窓がはがあいてゐた。釜山の舊市街は海岸のわづかの平地にあり、すぐに山地にさしかかつた。新開地らしく、うゑたばかりのひくい木ばかりで、あたらしい高層建築がつらなつてゐる。一戸建も四角の家がおほく、瓦屋根の家はすくない。その瓦屋根は日本のよりややそつてゐる。かういつた無趣味な新市街をとほりすぎて、列車はやうやく田んぼにでた。しかしふしぎに木がない。そこにおほきな川がながれてゐた。川はばがひろいだけでなく、水のながれがゆつたりとしてゐて湖のやうで、對岸ははるかむかうにかすんでゐる。となりの

席には五十臺の背廣をきた人がかけてゐる。
「スーウオンには何時につくんでせうか。」
わたしはすこし朝鮮語の會話をこころみるつもりで、この人のよささうな紳士にたづねた。
「スウウオンにいらつしやるんですか。二時ごろにつきます。朝鮮語はどこで勉强なさつたのですか。だけど朝鮮はまだ五十からうへの人には日本語が通じますからね。朝鮮語でおはなしになる必要はありませんよ。わたしも戰爭がをはるまで關西にをりました。」
その人は日本語でさういつた。わたしはせつかくの練習が出鼻をくじかれて、日本語にしないわけにはゆかなかつた。
「あの川はなんといふ川でせうか。」
「あれは洛東江です。太白山からでる川で、四百キロあります。」
川岸には冬がれした立木がまばらにたち、やがてポプラの木ばかりになつた。そこの道を、頭のうへにものをのせた女がたくさんあるいてゐる。洗濯をするのであらう。空はかすんだままである。列車の賣子がはじめてすがたをあらはし、林檎の袋いりを賣つてゐるが、林檎はきはめてちひさい。三浪津驛に九時三十五分についた。
驛をでると、柿の木らしい木がたくさんみえる。葉がおちてゐてよくわからないが、梨、いや林檎かもしれない。林檎園であらう。それに野生の松があるくらゐである。井戸端に大勢の女があつまつて洗濯をしてゐる。民家の屋根の棟は日本の寺のよりすこしそりが大きい。やがて山地にさしかかり、

松がおほくなつて、トンネルにはいつた。
「このトンネルが朝鮮で一番ながいんです。」
紳士がさういつた。さきほどの果樹がたくさんある。
「このへんは林檎の產地でしてね。」
それで車內にも賣りにきたのであつた。東大邱驛に十時二十五分についた。車內にまたべつの賣子が林檎を賣りにきた。
十時三十八分に東大邱驛をでた。沿線にはふるい瓦屋根の家がおほくて氣持がいい。しかしどういふわけか木がすくない。畠にビニイルハウスがあり、日本のやうに時ならぬ野菜をつくつてゐるらしい。郊外にさしかかり、ふるい一階建の朝鮮家屋のまへに朝鮮服をきたおきながふたりあるいてゐる。くろい服にしろい襟がみえてうつくしい。倭館といふ驛に十時四十分についた。倭館とは日本の使者を一旦とめて接待したところであらうか。ここは新羅の領土であつたはずだから、慶州にむかふ途上の宿といふことになるが、それにしてはまはり道だし、接待をするところとしては都からはなれすぎてゐる。しかし使者が洛東江を舟でさかのぼつてきて、ここでおりて徒で東にむかつたとすると、第一の宿場になる。倭館の町はいまはどこにあるのか、ホオムには人がふたりしかゐなかつた。
倭館をすぎておほきな川をわたつた。これも洛東江で、これまでしばしばすがたをあらはしてゐたが、これが最後であつた。川ばたにはたかだかとしたポプラの並木道があり、ただこんなのを見ても、日本的といふより、大陸的、西洋的で自然でいい。道は鋪裝してあるところもあるが、してないとこ

ろがおほい。田には水たまりのあるのもあり、段々畠や村落もある。龜尾（クビ）といふ驛に十一時五分についた。十一時二十分に金泉驛（キムチヨム）についた。

列車は山のなかをとほつていつた。半島のひとつの分水嶺である小白山脈にわけいつたのであつた。ひくい谷には村があり、そこに人がぽつりとゐて、いかにもさびしい。山地には灌木がすこしあるものの、やはり松がおほい。その松も鬱蒼としげるといふことはなく、まばらといつたはうがいい。畠にはおほきな牛の子がはしつてゐる。あそんでゐるのであらう。しばらくねむつたのち目をひらくと、列車はもう小白山脈をこえて、永同についた。十一時五十三分であつた。

それからしばらくして綺麗な川があらはれ、女が數人洗濯してゐた。大河で水がじつにすんでゐて、渚の砂濱がひろい。川原に石などひとつもなく、こまかい砂地がじつにうつくしくひろがつてゐる。となりの紳士は「錦江です」といつたが、このうつくしい川がかつての悲劇の白村江の上流であることをあとで知つた。そしてあとにもさきにも、東洋にも西洋にもこれほどうつくしい川をみることはないとおもつて淨福を感じた。小白山脈のすゑのひくい丘を牛がくだつてゐる。そのしたには段々畠があり、ポプラの並木道がある。家がめだつてきて、あたらしい家の屋根のわきに四角のおほきな煙突がでてゐる。これがオンドルの煙突であることは一見してわかつた。大田（テジヨン）に十二時二十三分についた。人口六十萬の大都市だといふ。

錦江のおほきな川水が依然としてうねりながれ、そこにひろい砂濱を展開してゐる。じつにうつくしくて、みてゐてみあくことがない。その支流の小川のふちを女たちが頭のうへにたらひをのせてあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com